

日本の中小企業が歩む、リオへの道

# 競技用品に秘技あり！

八月五日からブラジルで開催されるリオデジャネイロ五輪・パラリンピック。公式採用される競技用品には、日本製しかも中小企業の製品が少なくない。大会は、細部にまでこだわる技術をアピールする絶好の機会。選手同様、金メダル級の活躍をする「隠れたヒーロー」取材した。



取材・文 山路正晃

## 「青い瞳（レジューブルー）」の卓球台に 込めた熱き思い

株式会社三英<sup>さんえい</sup>

所在地	千葉県流山市
設立	1940年
社員数	約100名
業種	卓球台・スポーツ用品 などの製造・販売

これまでにない色の卓球台がリオに登場する。三英が今年四月に発売した新台「インフイニティ」だ。

これを起爆剤に、同社は海外展開のアクセルを踏みこむ。

### 最初の公式採用で 学んだ教訓

セロナ五輪で公式サプライヤーとなった。

卓球台の国内トップメーカーである三英は、一九九二（平成4）年のバル

「バルセロナ五輪前の約一〇年間は、弊社の業績が大きく伸びた時期でした。その勢いに乗って、五輪公式採



三英の三浦慎社長

用にチャレンジしたのです」（三浦慎社長）

五輪公式採用となるには、製品の



今年1月の全日本選手権で優勝しガッツポーズを取る石川佳純選手。同大会で使われたのも三英の卓球台だ  
(写真 朝日新聞)

評価が高いことはもちろん、資金面での安定性なども考慮される。企業としての総合力が求められるのだ。三英にとっても、バルセロナでの公式採用を目指したことは、「力試し」としての意味合いが大きかった。

「当時の弊社は、公式採用自体が目標になっていた、その後の展開なんて

まったく考えていませんでした。『これを機に世界に打って出よう』という気持ちではなかったし、そのための力も準備もありませんでした」

三英は、バルセロナ五輪に採用されて以来、アトランタ五輪(96年)からロンドン五輪(2012年)までの五大

会では、公式サプライヤーにならな

かった。

「バルセロナ五輪での経験

によって、『世界進出の用意もないのにオリンピックに公式採用されても、負担ばかり大きくてメリックトがない』と痛感したので

す。それに、九二年くらいをピークとして弊社の業績が悪化してしまい、オリンピックどころではなかったということもあります」

それが一転して、リオ五輪での公式採用を社内一丸となつて目指した背景には、二つの大きな変化がある。

「一つは、過去五年間の業績が好調で、年一五〜二〇

割くらい売り上げが伸びてきたこと。五輪にチャレンジするだけの余裕ができたのです。

もう一つは、弊社の卓球台の国内シェアが七五割になって、これ以上拡大の余地がなくなつたことです。すでに生産台数も横ばいになっていて、海外展開以外には成長する道がない。そのためにも、五輪公式採用で海外での知名度を上げる必要があつたのです」

二四年前のバルセロナでは、公式採用自体がゴールだった。それに対して、リオ五輪への挑戦は社運を懸けたものであり、世界に向けてのスタートなのだ。

リオ五輪公式採用が国際卓球連盟から伝えられたとき、喜びに沸く社員たちに、三浦社長は次のように言った。

「これを必ず海外展開に結びつけていくぞ。そのための公式採用なんだ」

## 「リオを目指す台」はこうして生まれた

かつて卓球台といえば黒に近い深

緑だったが、いまは鮮やかなブルーが主流になっている。一九九〇年代初頭にその青い卓球台を開発したのが、三英であった。

「国際卓球連盟の会長から、『卓球台の色を明るいイメージに変えたい』という依頼を受けたのです」

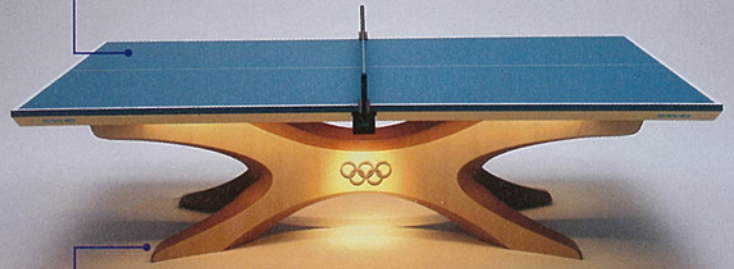
さまざまな色を試したあとでたどりついたのが、現在のブルーだったのだ。

その三英が、リオ五輪のために作り上げた新台が「インフィニティ(無限)。天板には、フランス語で「青い瞳」を意味する「レジュブルー」と名付けられた新色が用いられている。光の加減でブルーにも見えればグリーンにも見える奥深い色だ。

これは、海外進出のための新色でもある。すでに二〇一一(平成23)年、スイスに拠点を置き、ヨーロッパ展開の準備を開始した。卓球の盛んなヨーロッパではいまま深緑の卓球台が主流であり、その中に違和感なく溶け込める色として、青にも緑にも見える色が選ばれたのだ。色を決めるまでには、日本のトップ選手たちにプレーしてもらったりもした。

## リオ五輪使用台「インフィニティ」

天板色「レジュブルー」は、フランス語で「青い瞳」という意味。  
光の加減で青にも緑にも見える



脚部は東日本大震災の復興の願いを込めて東北のブナを使用。  
柔らかな曲線で、「∞」=無限大をイメージしている

写真提供 株式会社三英

台の脚部にも大きな挑戦があった。一般的な金属の脚ではなく、木製の脚にしたのだ。柔らかな「オーバル曲線」が用いられた脚部は、無限大の記号「∞」がイメージされている。

「木製の脚は、金属に比べて強度が足りないという難点がありました。球が板面を叩くと、衝撃で脚部が振動します。木の脚は振動の収束までに時間がかかり、それがプレーに影響してしまうのです。次に板面に球がぶつかったとき、バウンドがイレギュラーしてしまう。その振動をいかに早く抑えるかということと、デザインとのせめぎ合いがありました」

球のバウンドの安定性は、もともと三英の卓球台の大きな強みである。

「トッププレーヤーは、台のクセを瞬で見抜きます。『この台はあそこがイレギュラーする』とわかれば、そこを狙ってくる。大きな大会になると、特に負けた選手から運営側に『今日の台はバウンドが不安定でやりにくかった』というクレームが入るそうです。しかし、弊社の台にはそういうクレームがほとんどありません」

バウンドの安定性は三英の矜持きやうじであり、おろそかにすることはできなかった。だからこそ、振動を抑えるという難題をクリアするため、名

門家具メーカー、天童木工（山形県天童市）と共同で開発に取り組み、試行錯誤を重ねた。脚を作るために、足掛け二年くらいかかったという。

当初、「リオを目指す台だから」ということで、「インフィニティ」にはブラジルの木を使う予定だった。しかし、開発途中で東日本大震災が起きたことで、東北のブナ材を脚部に使うことにした。

「被災地の復興への思いも、リオに届けたいと思ったのです」

たくさんの「思い」を乗せて、色鮮やかなレジュブルーの卓球台が、リオで世界に披露される。